

## なぜ特別支援学級・学校の在籍児は急増しているのか？：排除としての「途中転籍」に注目して

赤木和重（神戸大学大学院 人間発達環境学研究所 准教授）

## 問題と目的

特別支援学級・特別支援学校の在籍児数は、この10年でおよそ2倍に急増している。国際的にインクルーシブ教育が推奨されている状況のなかで、特異的な事象といえる。しかし、特別支援学級・学校の在籍児の急増の原因について、定量的・実証的な分析は十分になされていない。そこで、本研究では、小学校時期の途中で通常学級から特別支援学級もしくは特別支援学校に異動する「途中転籍」という事象に注目して、小学校時期における途中転籍の児童数の推移およびその理由を実証的に明らかにすることである。

以上の目的を達成するために、学校基本調査を用いて、約50年間の転籍児の動態分析（研究1）および、教員を対象に、途中転籍の背景についてインタビュー調査（研究2）についての研究を行う。

## 研究1

**目的：**1968-2013年度の小学校期における途中転籍率の推移を学校基本調査の統計資料を活用して明らかにする。

**方法：**学校基本調査を分析対象資料とし、独自に計算式を開発して、途中転籍率の算出を行った。具体的には、同じ年度に入学した児童を1つのコホートとして、コホートごとに転籍率の算出を計算した。加えて、1年生時から6年生時までの小学校・通常学級に在籍する割合を算出した。

**結果と考察：**1968-2013年度における小学校児童の「転籍率」の推移が、図1のように明らかになった。この結果から、途中転籍は、「第1期：『転籍率』の減少期（1968-80年度）」、「第2期：『転籍率』の維持期（1981-92年度）」、「第3期：『転籍率』の増加期（1993-2013年度）」に分けられた。近年の特別支援学級・学校の増加の一因として、途中転籍児の増加があることが示唆される。

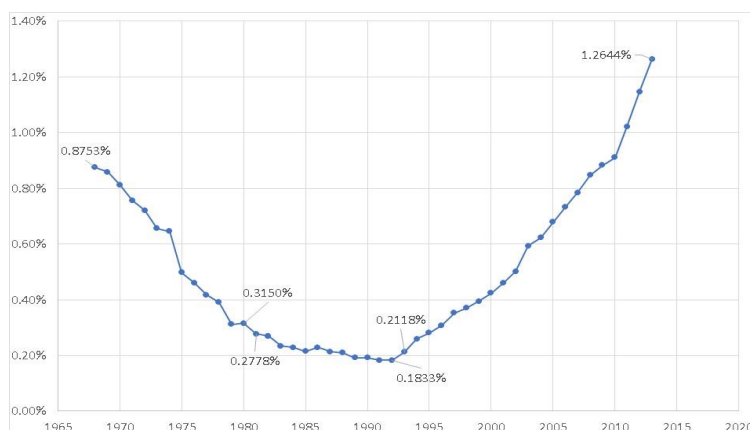


図1 1968-2013年度における小学校通常学級在籍児童の途中転籍率の推移

## 研究2

**目的：**途中転籍児が増加する原因を探索的に探ることを目的とする。

**方法：**40代の小学校・特別支援学校教員A先生に対してインタビューを実施した。転籍が行われる理由や、教員や保護者が転籍をどのようにとらえているのかについて尋ねた。

**結果と考察：**A先生の語りから、以下の事実が明らかになった。それは、保護者と教師が必ずしも、途中転籍をネガティブなものとしてとらえていないことである。特に、教師は転籍を「特別支援教育の成果」としてとらえている可能性が明らかになった。これは、現在もとめられているインクルーシブ教育や共生社会の推進の流れとは、「逆行」といってもよく、さらに検討すべき知見である。

このような転籍を「成果」とみなす背景には、(1) 特別支援教育の広がりに伴って、「発達障害のある子ども→特別な支援が必要→特別支援学級へ」という図式化が強まったこと、(2) 学校現場が「危機回避」を意識するあまり、トラブルをおこす子どもを過度に問題視して、特別支援学級へと方向づける傾向があること、の2点が想定される。

もちろん、あくまで事例的な報告から導きだされた仮説であり、今後、さらに研究協力者を増やして、仮説を検証・精緻化していく必要がある。そのうえでとなるが、途中転籍を「成果」とみなす教師の認識が、研究1で示したような近年の転籍児の増加につながっている可能性があり、特別支援教育の「進展」を改めて検証する必要がある。

共同研究者（大塚真由子・金丸彰寿・呉文慧）